

穎原退藏著作集

第十五卷

潁原退藏著作集

第十五卷

額原退藏著作集 第十五卷

定価 二〇〇〇円

昭和五十四年十一月一日印刷
昭和五十四年十一月十日発行

著 者 額 原 退 藏

発行者 高 梨 茂

印刷者 山 田 博

発 行 所 中央公論社

東京都中央区京橋二一八一七
電話(五六一)五九二一一九

振替東京二二三四
©一九七九 検印廃止

目次

雑俳書解説

五

川柳雑俳用語考

六〇

川柳の文芸精神——大阪における初代川柳忌記念講演

二五九

川柳以前の川柳

二七六

川柳と俳句

二八四

雲鼓と『夏木立』

二八七

雲鼓の俳歴 最初の笠附集『夏木立』

鷺水点の冠句

三〇二

冠句の将来

三〇八

狂詩概説

三二〇

書名・語句索引

三七

後記

三四九

雜俳・川柳
二

雑俳書解説

例言

一 ここにあげた書目は前句附・笠附・折句等純粹の雑俳書のほか、江戸俳諧の高点附句集をも加へた。これらは宝永・正徳頃までに刊行されたものは、知れるかぎりこれをあげることにしたが、享保以降の分は主要なものにとどめた。また曆摺の万句合の類は全部これを省略した。

二 雑俳書には旧版の書をそのまま、もしくはわづかに一部分を改竄して題名を改め、新板のごとく装つたものがすこぶる多い。これらは氣のついたものだけは一々その由を附説しておいたが、なほ粗漏ももとより多いだらう。また享保以降の上方版前句附集には、所々の奉納句数丁つつを取合はせて一冊にした類のものが多く、書名も一定してゐないものすらある。この種のものほとんど解説の煩に堪へないので、省略に従つたものが多い。

三 同一書名で数篇続刊されたものの中、その最終篇が不明なものも少なくないので、これらは知り得た篇数までを示した。随つてかならずしもそれが最終篇でない場合もあらう。

四 書目は刊行の年代順によつてあげ、刊記のないものはその序跋の年次に従つた。また全くそれらが不明のものはしばらく推定年代によつて適當の所にあげた。ただし便宜同種のものや一方に附説すべ

きものなどは、年代の順にかかはらなかつたものもある。また江戸の俳諧高点附句集はこれを一括して最後に掲げた。

五 雑俳書の体裁はだいたい小本か横小本に一定してゐるから、特殊のもののほか書冊の型は記さない。ただ横小本だけ（横）としておいた。

六 本解説はほとんど管見の範囲にかぎられてゐるため、重要なものでなほ洩らしたもののや、異版その他についての遺漏も多いことであらう。識者の補訂を得たら幸ひである（（編者註 書名の右下に*印をつけたものは、本書作集第十四巻所収「古版前句附」の項に解説がある））

前句
諸点 咲やこの花*（横） 元禄五年十月

前句附専門の集として特に横小本の体裁をとつたものでは、管見の範囲中最も古い。浪華散旅静竹窓菊子の撰でその自序がある。序に「摂州浪花前句長点抜粹」とあるとほり、由平・万海・来山の評になる前句附の長点を抜萃したものである。巻頭に各点者自筆の発句を模刻して掲げ、長点句には評語をも附してある。なほ外篇として、似船の選んだ『苗代水』（元禄二年刊）の中から発句十二、附句十四を転載し、また言水・羅青・友水・又玄・村女の点した前句附を添へてある。羅青以下の点者は伊勢の宗匠で、その点になる作者はすべて越後・日向の人々である。当時すでにかかる僻陋にまで前句附が行はれてゐたといふことは、「雑俳前史」に述べたごとく、前句附の流行がむしろ直接指導をうける俳諧の宗匠を得がたい地方に盛んであつたことを物語つてゐる。大坂、雁金屋・京、松葉屋・江戸、万屋板。

前句
諸点 難波みやげ（横） 元禄六年正月

前者と同じく静竹窓菊子の撰。西鶴・豊流・遠舟・調和・不角・常牧・和及点の前句附高点句集である。各点者の自筆発句をそれぞれ模刻して掲げてあることも『咲やこの花』に同じ。なほ右の点中、不角点の分は『二葉の松』（元禄三年刊）、和及のは『水荳の岡』（元禄五年刊）から抜抄したものである。板元『咲やこの花』と同一。本書の点者の名だけを埋木して改め、『唐紅』と題した享保頃の後刷偽版もある。

〔国書刊行会の翻刻本は最後の二丁分を脱落してある〕
〔編者註 国書刊行会翻刻本も後刷偽版である〕

奈良土産*

元禄七年二月

田宮慎の撰。来山・由平・万海・西鶴・西吟・幽吟・似船・言水・和及・不角・調和等の高点句、調和判の発句合（これは『続の原』の抜抄である）、万海・虚風・团水・一礼等の笠俳諧（笠附）、および四季の長歌と題して季の詞を五七調の長歌に作つたもの等を雑然と収めてある。『続の原』の一部や季語の歌などを収めてゐるのでも、普通の俳書的要求が多いことは察せられるが、事実その句もすこぶる俳諧調のものである。大坂、雁金屋庄兵衛板。

俳諧口こたへ*

元禄七年五月

烟月堂林鴻点の前句附・切句（笠附）の集。板元不詳（編者註 会）。

夏木立（半）

元禄八年跋〔補記〕

堀内雲鼓撰。冠附専門の撰集の最初として、撰者みづからその著『西国船』ではこるところのもの。元禄八年の初夏のころ俳諧修行の門人達に課したもののの中から選んだといふ。京、井筒屋庄兵衛板（本巻所収）。

〔雲鼓と『夏木立』参照〕

俳諧 高天鷲（横）

元禄九年八月序

和州御所町平野良弘が同地方の人々の高点句を集めたもので、はめ句を指摘したりしてゐる。点者は
鞭石・滴水・暮四・晩山・雲鼓・言水・文十・惟中・何中等。本書一名『誹諧まめ男』といふ。大坂、
野村長兵衛板（編者註 初版本は大坂、雁金屋庄兵衛板、元禄九年十一月刊。見出し題名はそ）の
原題簽によつて改めた。本解説は国書刊行会翻刻本と同じ後刷偽版による。

誹諧住吉おどり 元禄九年十一月序

増田円水撰。雲鼓・円水・只丸・島水・随流・鷺水・晩山・好春・如泉・歌木・風山等点の笠附集。

笠附のみの集としては、雲鼓の『夏木立』や『高天鷲』の序文中に見えて笠附集かと思はれる『梅の花
笠』（伝本）とともに最も古いものである。京、長谷川庄兵衛板。刊記だけを入木して改めた元禄十二年
の再版本もある（編者註 「長谷川文調軒板行」の
の刊記をもつ後刷本あり。

笠付前句ぬりがさ（横） 元禄十年二月

梅月堂閑水撰。団水・伴自・万海・賀子・一礼等点の笠附、西鶴・来山・虚風・由平・万海・団水・
西吟・園女等の前句附勝句、および八衆見学歌仙と題して、我黒・似船・言水・梅盛・調和・其角・如
泉・来山の点した歌仙二卷、団水・好春・言水等の表八句点取等を含む。西鶴菴義延（北条団水）の序と
瓶月庵の跋とがある。俳書的要求が多い。難波、書林板（編者註 八衆見学歌仙は『俳諧菴園拾遺物語』より）。
撰者は、跋の筆者瓶月庵とすべきであらう。

江戸土産 元禄十年八月

江戸の不角・其角・不卜・調和・無倫・一品等の点した高点前句附集。その掲げられた句は多く各点
者の選んだ俳書にすでに収められたものの中から抜萃したらしく、大坂の書林が集めてこれを浪花にひ
ろめたものである。難波、書林板（国書刊行会翻刻本による「編者註 不角の『へらす』
（口）『不卜の『純の原』』などを利用した偽版である」）。

誹諧住吉御田植 元禄十三年正月

驚水亭如水撰。我黒・信武・以文・両楓・嘉桐・滴水・雲鼓・如水・雲山・帚木・好春・円山・了仙・収山・近之・歌木・雪山等点の笠附集で、題の五文字を以呂波順に排列したのが新しい試みであり、また難解の句には簡単な註を施してある。京、永聚屋七良兵衛板。

たみの笠* (横) 元禄十三年正月

梅月堂閑醉撰。一礼・古柳・我黒・言水・如水・来山・伴自・团水・園女等の点した笠附と、来山・園女・才磨・万海・团水・伴自・虚風等の点した前句附とを集めてあり、なほ奥に「右拔句之分当流俳諧之百韻五十韻之内より秀句を撰出、付肌之心行初心之為に此所に出ス者也」として、普通の俳諧の附句をも抜いてある。吉野屋次良兵衛・富士屋長兵衛板(一本に「書林 野村板」行とあるものもある)。

俳諧歌かるた*
俳諧馬たらい

元禄十三年十一月跋

『歌かるた』は万海・一礼・团水・園女、『馬たらい』は来山点の笠附を集め、なほ『馬たらい』には前出『江戸土産』の大部分をそのまま附綴してある。両者は題名を異にしてゐるが初めから合はせて一部として梓行されたものらしい(二本見たが二本とも合冊にしてある)。白梅園驚水の序がある。板元不詳(編者註 本著作集第十四巻一七〇頁の編者註参照)。

俳諧寄太鼓* (横) 元禄十四年正月

園女・釈有・只丸・来山・由平・一礼・伴自・万海・文流・何中・虚風・賀子・团水・才磨・我黒・歌木・円山・鞭石・滴水・如春・定之・玉雪軒・嘉桐・暮三・信武・雲鼓等点の前句附勝句、一礼・来山・伴自・团水・園女・賀子等点の笠附勝句を集め、なほ巻末に「当流俳諧附肌仕様拔句」と題して、普通の俳諧の附合をも載せてある。しかし句風は、

口 あ い て 居 る く
後家の子が弟を産めとせがみけり

あ ち ら こ ち ら く

団扇では思ふ様には招かれず
(この句次出の『かはりこま』には「ぬらりくらりとく」
団扇では思ふやうにはたゝかれず」となつてゐる)

せ い て 来 る な り く

腰元の顔に口上がけつまづき

等、やうやく雑俳としての特色を示してきたものが多い。大坂、富士屋・京、菊屋板。

俳諧綱はかま*
元禄十四年十月

長井伴自の序があり、三ヶ津の高点句を書肆が集めて刊行した由を記してある。来山・由平・伴自・
団水・園女・一礼・万海・岸紫・諷竹・何中・虚風・才磨・言水・如泉等点の笠附・前句附、伴自点の
笠段々附を集む。ただし終りの二十五丁以下は前出『難波みやげ』の十四丁以下を、所々改竄して加へ
たものである(二本見たがいづれもさうなつてゐる)。大坂、書林板。

笠附 かはりこま*
元禄十四年十一月

園女・一礼・伴自・万海・由平・来山・只丸・団水・才磨・文流・如泉・雲鼓等、大坂・京都の点者
三十余人の前句附・笠附の勝句集。

ど う も い は れ ぬ く

下女部屋に親仁の眼鏡落ちて有
死ぬる迄かはゆがられて貧乏する

小 う さ ん な 事 く

旦那様の灸の蓋してをりました

申子が籠った宮の禰宜に似た

等の句がある。大坂、富士屋・京、菊屋板（編者註 本書の後半笠附の部は、次項『鳥おどし』を利用した偽版。）。

鳥おどし*（横） 元禄十四年

来山・一礼・言水・園女・団水・才磨・伴自等点の笠附集で、終りに発句を附載してある。奥附を欠くが『日本文学大辞典』所載写真の説明に元禄十四年とあるから今これに従ふ（後述『友ちから』の奥附に本書の刊行たることは、明らかなである）。板元不詳（編者註 元禄十四年十一月刊。大坂、富士屋長兵衛・京、菊屋七郎兵衛板）。本書の最初一丁だけを新たにかへ、以下もとの板木をそのまま用ゐて出した『当流笠附俳諧鳥かぶと』といふ後刷もある。例の書肆が新刊物のごとく装つた奸策である。

若えびす*（横） 元禄十五年正月

白梅園驚水撰。みづから序に言つてゐるとほり、当時知名の点者の高点笠附・前句集を集め、なほ褒美取の起りを説き、四季の発句・俳諧の付心等をもあげて、すべて雑俳をもつて俳諧の稽古たらしめようとしてゐる。随つて前句もいはゆる正体無き句意の漠然たるものは少なく、大体俳諧的要素を多く含んでゐる。しかしなほ時代の変遷は争はれず、これを『咲やこの花』『難波みやげ』等に比すれば雑俳的特色がいちじるしく見られる。点者は如泉・才磨・只丸・我黒・驚水・晩山・好春・万水・定之・幸佐・一晶・随流・調和・其角・鞭石・轍士・言水・一有・来山・園女・露川・惟然・団友等である。京、金屋市兵衛板。

冠独歩行（横） 元禄十五年正月

松淵・喜至二人（おそらく書肆か）の撰。露月・一調・東格・好柳・竹翁・風子・彩象・舟山・扇山・一銅・酔月等、江戸点者の点した笠附集。江戸における雑俳書の古いものとして注意される。江戸、和泉屋三郎兵衛板。

西国船* 元禄十五年二月

京、吹簫軒雲鼓の撰。自序に、
やつがれこの二年三年西国行脚思ひ立ちしが、足のとどまる所にて拙き筆を染て人々の句を批判し、其撰たるをそこ／＼に書留置きしを、書林何がし見てこれを梓に物せむといふ。げにもかいやり捨んは本意なきわざなり、ともせよとうなづくに、名をいかに言ひてむと。さればよ、多くの人の句をするなれば西国船といはむといふ。

と言つてゐる通り、京の花笠・備前の紅葉笠・因幡の月の笠・伯耆の時雨笠・美作の雪の笠と題して、それぞれその地方の人々の笠附を、雲鼓が点して集めたものである。なほその間に撰者が元禄十二年十月備前から帰洛した折の吟や、同十四年秋因伯地方に赴いた時の発句・連句等をも交へ収めてある。また京の花笠の終りに、笠附の起源について説いてある条は最も注目すべきである。（雑俳前史）（編者註本者。作品集第十四巻所収）参照。

諸国 俳諧替狂言（横） 元禄十五年閏八月

平野良弘撰。その自序によれば、撰者が前に編した『高天鷲』より後、かつかつ書留めておいた句の中、上座ばかりを二千余句書抜いて板行したものの由で、題号は元禄十四年の『寄太鼓』の跡を追ふの

に因んだといふ。言水・晩山・鞭石・雲鼓・我黒・芳山・来山・一礼・団水・竜信・天垂・風慮・伴自・文流・園女・江水・才麿・豊流・西吟・白花等点の笠附・前句附集。句主は大和・河内の田舎の人が大部分を占めてをる。なほ当時点取のため、はめ句が盛んに行はれたことを指摘してゐる。大坂、万屋彦太郎板。

当世誹諧楊梅（横）

元禄十五年九月

江戸の調和・其角・不角、京の我黒・晩山・鞭石・好春・鷺水・言水、難波の来山・才麿・園女・伴自・文流・万海・団水・由平・賀子・一礼等の点した前句附・笠附の高点句集。大坂、柏原屋清右衛門板。奥附に『誹諧梓神子（あづまこ）』出版の予告があるが、伝本を知らない。

附冠 もみち笠（横）

元禄十五年十月

江戸の点者、丹水・露月・梅山・酔月の点した前句附・笠附集。巻頭に丹水判の小倉附（「雑俳前史」参照）があり、「定家（サダイ）をしたへしぐれのもみち笠」といふ句を題してゐる。これまた江戸の雑俳集として注意すべく、この頃からやうやく江戸にも雑俳が汎く行はれる兆を示してきた。前句附の方は比較的俳諧趣味のものが多く、笠附には奇警味・滑稽味に富んだものが大分見られる。

雨の日は 蠅とつて居る 神楽堂

同 和泉が 芝居古戦場

ひたすらに 恋売る湯女が貸浴衣

かしこまる ふらすこの魚猫の伽

のごとき類である。江戸、万屋清兵衛板。

俳諧口三味線*

元禄十五年十月

華洛、瀟蛙の序がある。何人か詳かにしないがその撰であらう。只丸・鞭石・林鴻・言水・如水・定之・古柳・我黒・晩山・女草・玉意等点の前句附・四季之発句・洛陽名所発句・傾城名寄の発句、および笠附を収む。題名は中に遊女名寄の発句があるので、八文字屋の役者評判記『役者口三味線』に倣つたのである。なほ終りに初学者のため、句ごとに秘事（序に著した瀟蛙はあるいはこの如水の匿名か）の天爾波を入れた彰山如水の表六句を掲げてあるが察せられる。京、永楽屋七良兵衛板。

冠 附
あかゑぼし*
(横)

元禄十五年九月

巻末に「集者 松葉軒」とある。松葉軒とはすなはち書肆万屋のことである。江戸の竹丈・露月点の笠附集。本書原本奥附に「享保八卯正月」の刊記があるが、山崎美成が『海録』に引用したものには、元禄十五年印本とある。内容から見てもまさに当時の出版と思はれるから今これに従つた（享保八年のは後刷本か、もつてあろう。なほ『西国船』や『馬たらい』の序にも『赤ゑぼし』の名が見えるが、それは京都の笠附集と思はれ、かつ少なくとも『馬たらい』より前の出版でなければならぬ。随つてこの江戸の『あかゑぼし』とは別本であらう。）。江戸、万屋清兵衛板。

俳諧寄相模

元禄十五年

調和・一晶・其角・丹山等の前句附がある（原本未見。『日本文学大』『辞典』所載写真による）。

俳諧いかりつな（横）

元禄十六年正月

花洛、鉄の舟撰。従来出版された諸書の中から、前句附・笠附の高点句を集めたもので、諸流をつなぎとむる意で「碇綱」と題した由が自序に見える。随つて内容はすべて前出諸書に一度載せられたもののみである。京、河勝五郎右衛門・江戸、升屋五郎右衛門板。